

氏 名	中 野 力
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（経済学）
学 位 記 番 号	甲経第43号（文部科学省への報告番号甲第399号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年2月14日
学 位 論 文 題 目	ロバート・ウォーレスと理想社会 —人口・経済・神慮—
論文審査委員	（主査）教授 篠 原 久 （副査）教授 竹 本 洋 教授 原 田 哲 史 生 越 利 昭（兵庫県立大学教授）

論文内容の要旨

本論文の目的は、18世紀スコットランドの啓蒙知識人兼教会人のロバート・ウォーレス（Robert Wallace, 1697-1771）の思想像を、彼の三大著作（『古代と近代の人口』、『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』、『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』）と未公刊草稿類を中心に解説し、これまでのウォーレス思想の通説（すなわち、人口増加に資する素朴な農業社会の重視という観点から商業社会の奢侈的生活を批判し、平等な理想社会を構想しつつも、それが過剰人口から崩壊に至るというユニークな「暗いユートピア」像を提示したというもの）に対して、商工業重視という新たなウォーレス像を提示し、同時に人口に関する彼の基本思想が、神の摂理（＝神慮）に基づいて展開されていることから、マルサス『人口論』でのユートピア批判の先鞭をつけたものであることを明らかにしようとするものである。その展開過程は以下の10章から構成されている。

第1章 ロバート・ウォーレスの研究の可能性

ウォーレスの経済論とマルサスの先駆者としての人口論——海外四学位論文をめぐって——

第2章 ロバート・ウォーレスの宗教論（前期ウォーレス）——出版物に見られる正統的カルヴァン主義と草稿にみられる異端的カルヴァン主義との比較考察——

第3章 1740年代のウォーレス——ウォーレス経済論の萌芽——

第4章 1760年代前半のウォーレス——『人口論』と『従順な服従』——

第5章 1750年代後半のウォーレス（1）

ロバート・ウォーレスと『『ダグラス』論争』——演劇とスコットランド教会——

第6章 1750年代後半のウォーレス（2）

ロバート・ウォーレスとジョン・ブラウン——思想の類似点と相違点——

第7章 1760年代のウォーレス（1）

ロバート・ウォーレスのユートピア像——人智と神慮との関連で——

第8章 1760年代のウォーレス（2）

ロバート・ウォーレスとモーベルテュイ——幸・不幸の比較について——

第9章 1760年代のウォーレス（3）

第10章 ウォーレス、ゴドウィン、マルサスの人口論とユートピア——マルサスの先駆者としてのウォーレス——

第1章では、ウォーレスに関する日本での未紹介海外学位4論文（すなわち1973年のスミス論文、79年のディロン論文、94年のピータスン論文、97年のコ克蘭論文）を整理検討し、そのうちの（ディロンを除く）3論文がウォーレスの農業重視の側面を強調し、人口論に関しては2論文（スミスとピータスン）がマルサスではなくその論敵ゴドウィンとの類似点を指摘していることが明らかにされる。これらの論点に対して、著者は以下の諸章で、ウォーレスの商工業重視の経済論と、ユートピア批判としてのマルサスとの類似性を明らかにしようとする。

第2章では、その作業に先立って、教会人ウォーレスの宗教上の特異な立場が、刊行された『説教』と未公刊草稿とにみられる見解の相違から明らかにされ、啓示を重視する『説教』での正統派的な立場と草稿での教会批判的な立場との齟齬が問題視される。1720年代にはグラスゴーの神学教授シムスンとエディンバラのグラス師が信仰告白の署名問題をめぐってそれぞれ教会総会から異端的な見解を表明するものとして告訴されていたが、ウォーレスは草稿で彼らの立場を支持する考えを述べていたのである。とりわけシムスンの立場は18世紀後半の教会内「穏健派知識人」（すなわちスコットランド啓蒙の担い手たち）によって受け継がれていくことになるが、草稿でのウォーレスの立場は、著者によって「初期穏健派知識人」ともいえるべき見解の表明として理解されることになる。

次の第3章以降で本格的に、ウォーレスの経済・政治・人口に関する議論が展開されるが、まず第3章では、のちのウォーレス『人口論』（古今人口比較論）の草稿が書かれたのと同時期（1745年）の草稿（「スコットランドのジャコバイトへの忠告」）のなかに、「名誉革命以後スコットランドが豊かになっている」ことを明らかにする商工業重視の立場、すなわち後の『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』（1758年）での経済発展重視のものと同様な思想が強調されているという事実を鑑みて、この「忠告」草稿がウォーレス経済論に関する通説（すなわち、『人口論』の農業重視と『諸特徴』の商工業重視のあいだにウォーレス思想の矛盾がみられるとするもの）を批判する重要な証拠となっている点が明らかにされる。同時に著者は「ウォーレスの経済論と統治論の原点」としての「忠告」草稿という観点から、『人口論』（1753年）そのもののなかにも、通説とは異なる商工業重視の立場が読みとれる次第を明らかにしている。

第4章では、第3章での「経済論と統治論の原点」という観点を踏まえて、ウォーレス『人口論』での経済論（商工業重視）の側面が引き続き指摘されるが、とりわけ『人口論』附録（ヒューム『政治論集』中の「古代諸国民の人口について」の批判を目的とするもの）でのローマ法の議論が、エディンバラ大学市民法教授マケンジの助言によるものであるという、新たな論点が「マケンジ書簡」によって証明されている。また『人口論』の翌年に出版された小冊子『従順な服従（絶対的服従）と無抵抗の理論の考察』は、いわば第3章でとりあげた「忠告」草稿の姉妹編ともいえるべきもので、抵抗権に基づく名誉革命の擁護と、その革命の恩恵としての商業・富裕・奢侈の利点が強調されている次第がここでも鮮明にされている。

第5章は、第2章でのウォーレス宗教論を補完する役割を果たし、次の第6章以下で展開されるウォーレスの本格的な経済論と人口論に先立って、18世紀半ばに登場した「穏健派知識人集団」との関係性を考察したものである。その場合の素材が穏健派牧師ジョン・ヒュームの作品『ダグラス』であって、牧師が戯曲を書くという事態に投げかけられた教会側からの批判に対して、種々の賛否両論（小冊子合戦）が展開されるが、著者はウォーレスの草稿「悲劇ダグラスの出版に際しての、教会人への平信徒による訴え」には、演劇の弊害面を指摘する福音派の特徴が垣間見られるものの、総じてこの小冊子の立場が穏健派的なものであることを、そこにみられる「奢侈の中庸論」、エディンバラとグラスゴーの「長老会警告」への嘲笑的表現、およ

び穏健派牧師（カーライル）への助言などから明らかにしている。

本論文後半の第6章以下で、ウォーレス経済論と、神慮に基づく人口論ならびにユートピア論が展開されるが、その冒頭の第6章では、ジョン・ブラウンの代表作『時代の風習と諸原理の評価』（1757年）にみられる政治・経済論との比較で、ウォーレスの『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』（1758年）での経済論の内容が明らかにされる。対仏7年戦争時に出版されたブラウンの作品は、ブリテンが軍事的・経済的にフランスに劣っている次第を、行き過ぎた奢侈に由来するブリテン国民の柔弱さに求めているのに対して、ウォーレスはブリテンの奢侈は墮落・柔弱さを生み出すものではなく、名誉革命がもたらした安全保障と自由とが、商業と技芸に好影響を与えていることを強調し、逆にフランスの政治体制の弱点が暗示されることになる。名誉革命体制の擁護という視点は、ウォーレスの諸著作を貫くものであって、著者は『諸特徴』刊行の10年後に書かれた草稿「統治の自由が商業および技芸を促進する影響と、専制が商業および技芸に及ぼす悪影響に関する考察」に言及しつつ、その表紙に書かれたメモ（「この草稿は『諸特徴』の新版を出すときに読まれるべきもの」）にも、この一貫性がみられることを指摘している。

第7章冒頭で、著者はウォーレスの主著『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』（1761年）全12章構成の目次を掲げ、従来の研究ではその最初の4章でのユートピア論だけに焦点が当てられていたのに対して、このユートピア論はそのあとで集中的に展開されているウォーレスの神学論との関係で理解されなければならないことを強調する。今回の論文の力点の一つがここにある、この第7章では、素朴で有徳な平等社会としてのユートピアが設立されたとしても、神の計らいのもとに創造されたこの有限な大地のもとでは、過剰人口によってユートピアそのものが必然的に崩壊してしまうことが明らかにされ、むしろユートピアの設立が神慮に反するのだという「反ユートピア論」の提示こそが『展望』の主題であったのだとの結論が下される。このあと、神から与えられた自由意志を人間が乱用することによって種々の悪徳が生み出されるのであって、悪の責任は人間にあるのだという彼の弁神論（神義論）が提示され、ユートピア設立に至りえない機構としての「悪徳」効用論という観点から、64年のウォーレス草稿「死と悪徳の必要性を証明する試論」にも言及されることになる。著者によればこの草稿は、『展望』前半のユートピア論が後半部の神学と関係づけられていることを証明する貴重なものであった。次の第8章と第9章では、以上の悪徳効用論に基づく神義論というウォーレスの「神学」が、それぞれモーペルテュイとケイムズ卿の「道徳哲学」批判という形で補強されることになる。

第8章での批判対象はニュートン理論のフランスへの紹介者として知られているモーペルテュイである。彼は通常は数学・天文学・力学・生物学等の分野での業績で知られているが、1749年に出版した『道徳哲学の試論』では、のちにベンサムに影響を与えたといわれる「快・不快の計算」に基づいて人間世界における「幸・不幸比較論」を展開し、人生では不幸量が幸福量に勝っているという結論を導き出した。ウォーレスはユートピア批判との関連で悪の存在を認めはしたが、それによってこの世界が不幸に満ちた陰惨なものになっていると考えたわけではない。彼は、被造物としての自然・動物・人間界の全体は調和のとれた美しいものとして神によって肯定されているとの観点から、モーペルテュイの結論を批判したのであって、悪徳容認論に伴いがちな不幸量優越論を弁神論の立場から拒否する必要があったのである。そしてこの悪徳存在の根拠を探る作業が次の第9章で展開されることになる。

第9章は「ロバート・ウォーレスとケイムズ卿——自由・必然論をめぐる」と題され、前章に引き続いてウォーレスの神義論が提示されているが、ここでの神義論は彼にとっては本論文第8章での「幸・不幸比較論」批判に基づく神義論よりもはるかに重要なものであった。同時にこの章は、本論文第2章と第5章でそれぞれ提示された初期草稿に見られる「初期穏健派知識人」としての宗教論と、「ダグラス」草稿に見られる「穏健派知識人」擁護論との対比としても興味深いものとなっている。ケイムズ卿ヘンリ・ヒュームはスコットランド啓蒙の大御所で、教会内の穏健派知識人（スコットランド啓蒙思想の担い手）のパトロンで

あるが、この第9章ではそのケイムズの「道德哲学」、すなわち『道德および自然宗教の原理に関する試論』（初版1751年、第2版1758年）が取りあげられ、その中心主題である「必然論に基づく欺瞞的自由論」が全面的に批判されているからである。神の摂理（神慮）との関係で、必然論をとるか自由論（自由意志論）をとるかという問題は、複雑微妙な論点で、スコットランド啓蒙の枠組みとしての宗教論（神学論）でも、時期的背景によって（穏健派と福音派の攻防の過程で）その力点の移動がみられたものである。自然界のみならず道德界にあっても「必然」の法則が貫かれているという（カルヴィニズムの立場からも支持される）ケイムズの立場は、道德界において人間が感じる「自由」は「欺瞞」的なものだとする特異な表現によって教会の福音派から「異端」として告訴されたものであるが、穏健派牧師たちによって支持されたこのケイムズの「必然論」が、1761年のウォーレスの主著『展望』において、反ユートピア論をささえる悪徳効用論と神義論を敷衍する立場から詳細に検討される。第2章と第5章ではウォーレスの宗教的（神学的）立場が「穏健派」に近いものとして提示されたのであるが、この第9章では穏健派とは異なる「自由意志論」の立場が、『展望』前半のユートピア論（＝反ユートピア論）を支える論拠として示されることになる。ウォーレスが問題としたのは悪や不幸の根源であって、その存在理由は人間の側に求められなければならない。世界が「善」として創造されたものであるかぎりその世界に存在する「悪」の原因は神に帰せられることにはならないからである。したがって悪徳や不幸の原因は、神から賦与された恵みとしての自由意志を人間が乱用（＝悪用）することにあるとの考えが『展望』論の結論としても提示される必要があったのである。

最後の第10章は、前章で展開されたウォーレスの「人口論」に基づく「ユートピア論」を、のちのゴドウィン＝マルサス論争に見られる諸議論と対比させ、人口論争上におけるウォーレスの位置づけを確定しようとするものである。マルサスはその『人口論』（初版1798年）において、人口論の先駆者の一人としてウォーレスの名前をあげているのだが、そのウォーレスの指摘したユートピアでの「過剰人口」論については、遠い先の出来事だとみなされているとして、これを批判したのであった。著者によれば、過剰人口を「遠い先の出来事」として論じたのはゴドウィンであって、マルサスはこのゴドウィンの見解とウォーレスの思想とを混同し、したがってウォーレスの『展望』を誤読したのであった。ゴドウィンは理想社会（ユートピア）「支持」の観点から過剰人口という事態を遠い将来のものとして楽観的にとらえたのに対して、ウォーレスはユートピアに「反対」したがゆえに過剰人口を現実の問題としてとらえる必要はなかったのである。マルサスは初版『人口論』末尾の2章で彼なりの神学を展開し、（ユートピア社会での）過剰人口による食料不足という事態を回避するために、現実世界での「悪徳と不幸」が存在させられているのだという神義論を提示している。先行研究においてもウォーレスの過剰人口論が、ゴドウィン思想（過剰人口楽観視論）と同一視されているものがあるが（海外二学位論文）、著者によればこれらの議論は、『展望』の議論（神義論に基づくユートピア批判）を精読するかぎり誤った解釈なのであって、ウォーレスの（『展望』での）人口論思想はマルサス『人口論』の重要な先駆として位置づけられねばならないのであった。

論文審査結果の要旨

18世紀スコットランドの教会内知識人としてのロバート・ウォーレス（Robert Wallace, 1697-1771）は、「初期」スコットランド啓蒙思想を代表する思想家の一人として位置づけられながらも、これまでは海外でもその本格的な研究（モノグラフ）が存在せず、1970年代以降になってようやく彼についての学位論文が提出され始め、日本においては18世紀の経済および人口思想との関連で彼の思想の概要が言及されるにすぎなかった。本論文はウォーレスの三大著作（『古代と近代の人口』、『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』、『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』）その他の刊行された著作のみならず、エディンバラ大学に所蔵されている多量の未公刊草稿類をも利用しながら、総体としての彼の思想像に基づいて、海外の四

学位論文にみられる農業重視と奢侈批判のウォーレス像という「通説」を批判し、名誉革命体制後のブリテンの経済的繁栄を支持する新しいウォーレス像を提示すると同時に、「ウォーレスを誤読したマルサス」という解釈によって、むしろウォーレスこそがマルサス『人口論』の先駆者であることを明らかにしたものである。

本論文の貢献は以下の諸点に見いだされる。

第1に、「スコットランド啓蒙思想」研究というより大きな枠組みに関して、18世紀半ば以降に登場する（啓蒙の担い手としての）教会内「穏健派知識人集団」との関係という、これまでの研究史でもほとんど触れられていない論点を取りあげ、初期（1720年代）と穏健派登場期（1750年代）の草稿類から、ウォーレスの立場を「初期穏健派」思想家の一人として位置づけながらも、1760年代の主著（『さまざまな展望』）では穏健派の神学とは相容れない思想が展開されていることをも指摘することによって、スコットランド啓蒙の宗教的背景との関連で彼の宗教思想の解明が必要なことを提示していること。

具体的には、第2章のウォーレス宗教論で、グラスゴウの神学教授シムスン（スコットランド啓蒙の父といわれるハチスンの恩師）とエディンバラの牧師グラス（異端的なグラサイト集団の祖）の教会批判論を擁護する草稿に言及し、これを第5章での「穏健派」の演劇論支持（戯曲『ダグラス』の上演擁護）の立場と結びつけながらも、第9章のケイムズ卿（穏健派のパトロン）の「必然論」批判では、自由意志論支持の立場から「穏健派」神学の枠組みが批判的に考察されていることである。

第2に、ウォーレスの商工業重視の経済論が展開されている『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』（1758年）が匿名で出版されていたことに鑑み、従来この著作が彼のものとして詳細に検討されることがなかったのに対して、著者は草稿表紙のメモ書きによってこれが彼の著作であることを確認し（この点については永井義雄氏によっても指摘されている）、ここでの奢侈を肯定する彼の経済論と名誉革命体制擁護論に注目することによって、この観点が1740年代の「ジャコバイト」（ステュアート王朝復興運動支持派）を批判する草稿の時点から見いだされることを明らかにし、この安全保障と自由に基づく経済社会論が彼の思想を貫くものであることを明らかにしたこと。

具体的には、第3章で1745年に執筆された草稿「スコットランドのジャコバイトへの忠告」（これはウォーレス「人口論草稿」直後に書かれたもの）を取りあげ、そこですでに「名誉革命体制」擁護論と「商工業の発展」を支持する経済論が展開されていることを明らかにし、この「草稿」をウォーレスの「統治論と経済論の原点」としてとらえたうえで、第6章で、1757年に出版されたジョン・ブラウンの代表作『時代の風習と諸原理の評価』（英仏政治経済比較論からブリテンの劣位を指摘したもの）を反駁するという観点から、ウォーレス経済論『ブリテンの政治的現状についての諸特徴』（1758年）を検討し、そこで奢侈肯定論と革命後の統治体制擁護論が、68年に執筆された草稿「自由な統治が商業におよぼす好影響と専制が商業に及ぼす悪影響」（『諸特徴』再版時での公表が予定されたもの）にも受け継がれていることが確認されていることである。

第3に、1761年の『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』をウォーレスの神学が提示されている主著とみなし、その前半で展開されている過剰人口に基づく「ユートピア」崩壊論（＝「反ユートピア論」）が、「悪徳」効用論という視点からの「神義論」（弁神論）によっている次第を確認すると同時に、マルサス『人口論』（1798年）でのウォーレス過少評価がマルサス自身の『展望』誤読によるものであることを明らかにし、そのうえでマルサス人口論思想の重要な先駆者としてウォーレスを位置づけていること。

具体的には、第7章で『展望』でのウォーレス「ユートピア崩壊」論が、その原因としての人間の「自由意志」悪用論と関係づけられ、この（天賦としての）「自由意志」が、第9章でのケイムズ卿の「必然論」を反駁する手段として用いられることによって「穏健派」神学との一つの相違点が指摘されたこと、そして最終第10章で、マルサスのウォーレス「誤読」の原因が、「過剰人口」楽観論という理由で、ゴドウィンとウォーレスの論点が同一視されたことに求められているということである。

しかしながら、本論文には、以下のような不備が認められる。

第1に、本論文では「スコットランド啓蒙思想」の重要な知識人の一人としてのウォーレスという位置づけが与えられているが、「スコットランド啓蒙思想」については「穏健派」知識人との関係が指摘されているものの、当該「啓蒙思想」についての著者自身による概観が与えられていない。望蜀になるかもしれないが、この領域での著者の研究続行を期待したい。

第2に、ウォーレスの『人口論』（古代と近代の人口比較論）はデイヴィッド・ヒュームの「人口論」（『政治論集』での「古代諸国民の人口について」）との相互対応過程から刊行されたものであるが、本論文では著者が「商工業重視のウォーレス像」を提示する際に、ヒュームからの影響面についてはほとんど言及されていない。奢侈容認論に基づくウォーレスの経済論を提示する場合にはヒュームの「インダストリ」論をとりあげ、両者の経済論の比較が必要のように思われるが、本論文にはこの種の関心が示されていない。

第3に、ウォーレスの主著『展望』でのいわゆる「ユートピア」論に関して、著者は「神慮」に基づく「ユートピア崩壊」論という側面を強調しているが、社会思想史上の「ユートピア」論には、現状社会への批判という観点が盛り込まれているのが通常である。ウォーレスが「神義論」に基づいて反ユートピア論を展開したという著者の立論はそれなりに説得的であり、本論文の力点の一つがそこに置かれているが、ウォーレスの草稿には男女関係（とりわけ結婚と離婚）にかかわる現状の社会制度への不満が示されているものがあり、ノーラ・スミス（最重要学位論文の著者）によってその草稿の解説が行われている。他の草稿で示されている教会批判との関連で、現状批判としてのウォーレス「理想社会」像をも提示する必要があったのではないだろうか。

以上の不備が見いだされるものの、刊行された諸著作ならびに草稿類の地道な読解作業によって、ロバート・ウォーレスの総体的な思想像をわが国で初めて明らかにしたという点は高く評価されるべきである。

以上、本審査委員会は、本論文の内容を慎重に審査し、2012年1月23日に口頭試問を行った結果、中野氏の論文が博士学位（経済学）を授与するに値するものとして評価したので、ここにその旨報告する。